聖刻群龍伝

龍睛の刻２

千葉 暁
Satoshi Chiba

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　三好載克

聖刻群龍伝

龍睛の刻2　龍の仔篇　鎮魂の章

プロローグ　5
第1話　イシュカークの女帝　17
第2話　謀反　105
あとがき　218

プロローグ

濡れた路面を馬車が進む。一見ありふれた箱形乗用車に映るが、車輪の音が静かだった。接地する外囲に護謨の輪を巻いているからだ。

「地面の凸凹を拾うような、細かい振動が減った気がするな」

乗客のひとりが瞼を閉じながら言った。すると向かい側の席に座る商人風の男が透かさず、

「多くのお客さまよりご好評をいただいております。加えて雨の日でも車輪が滑りにくく、制動装置の利きは従来より飛躍的に向上しています。これによって都市部での事故件数が減ることが期待できるでしょう。ただ――」

「待て。わしに当てさせろ――そうさな。耐久性に難があるのではないか？　利点は護謨の弾力性がもたらしているが、削れて減っていくからな」

「ご明察にございます。予想以上に摩耗が激しく五〇リー（二〇〇キロメートル）ほどしか持ちません。現在護謨の原材料に混ぜる素材を色々試しておりますが……」

「ああ、そういうことなら、イシュカークにどんな問題もたちどころに解決する天才がいる。護謨の樹から従来の二倍以上の採取法を考案したのもそのお方だ」

相談を持ちかけた男は、身を乗り出す。

「是非ともご紹介願います。それと――」

「わかっておる。増資と護謨の割り当てを増やすことであろう。新連邦でも第二帝国でも馬車の需要は毎年倍々で伸びておる。最初は金満家向けの高級車に限られるだろうが、このタイヤなる装備は必ずや普及するであろう」

「大蔵卿、お計らいを感謝します！」

「勘違いしてもらっては困るな。今のは新連邦閣僚としての発言ではない。もし明日の新聞に載りでも

したらこれまでの融資、便宜を図ったことも含めて全部をご破算にしなくてはならなくなる」

「承知しております、ルーファス閣下」

男は幾分青ざめさせた顔で秘密厳守を約束した。

ルース・ルーファスにはふたつの顔がある。

西方暦一八三六年に発足した《新ロタール連邦》の財務担当大臣に相当する大蔵卿、そして西方西部域でもっとも巨大な財閥とされる《クレイトー商会》の元会頭だ。元が付いていても、公職にあるため退いているだけで現在でも財閥を動かす立場にあることは誰もが知っている。

実際、護謨が《南方》だけで生育する植物の樹液だということすら近年まで知られていなかった。これまでは西方南部域諸国が樹脂の形で輸入し、独占的に販売していたが、四年前に新連邦に属する農林試験場が護謨の樹の移植に成功した。《商会》はこれを受けて、ゴア半島最南端チョル・ギー国の雨林地帯に一大農園を作った。ルースが護謨の割り当てまで口が利けるのはそのためだ。

ルースは同乗する男性秘書に命じて商会への指示書をその場でしたためさせる。署名はしない。ルースのこうした行動は、公職にある者として犯罪とまでは言わないものの（大蔵卿の権限を行使したわけではないので、たとえ謝礼を貰っても収賄にならない）、辞めたはずの商会を使うことは決して外聞がよいとは言えず、自身が関わったという証拠を残さないようにしていた。

途中で企業家を降ろす。試乗に借り受けた護謨タイヤを履かせた乗用馬車は、そのままルースの所有物になる。口利きの見返りとしては微々たるものだが、護謨の消費が拡大すれば《商会》が儲かる仕組みができている。彼個人は欲深ではなかった。

硝子窓の外に付着していた水滴が消えている。数日来しとしと降り続いていた雨が止んでいた。

ルースは愛用の杖で先程まで男が座っていた座席側の壁を叩く。

仕切り板が開き、御者が顔を見せる。
「ここで降ろしてくれ」
「神殿まで一街区以上離れていますが？」
「医者から歩くよう言われているのでな――ああ、おまえはこのまま乗っていけ。馬車に積んでる金をそのままにしておけぬだろう」
後半は秘書に向けた言葉だ。ルースは熱心なペガーナ信徒だ。特に商いの神ヘルマネーの神殿には毎年多額の寄進を行っている。
石橋の手前で馬車が歩道に寄せて停まり、ルースひとりが降りる。
夕暮れが迫る刻限とはいえ、歩道も車道も頻繁に人や車の行き来がある。都市の経済活動が活発な証拠だ。ちょうど橋の袂の桟橋に一〇人乗りの旅客船が接岸した。ルーフェンの神殿巡りをする観光客だろう。空席は見当たらない。観光事業にまで直接ルースが関わってはいないが、税収を気にする蔵相としては満足できる光景だ。
後方から追従してきた無蓋の馬車から屈強そうな男が降りて、徒歩でルースに近づいてくる。
「困りますな、閣下。こう予定にない行動ばかり取られては、警備の手配が間に合いません」
連邦政府警備部所属の警護官だ。大臣級の閣僚全員に護衛が付けられている。
「いつも迷惑かけて済まないな。わしは貧乏性なもので、外出するにしてもふたつみっつ同時に用事を片づけたくなってしまう。ああ、もちろん君たちには感謝しているよ。気楽に町中を歩けるのも優秀な護衛がついていればこそだ」
三〇そこそこの警護官はため息をつく。
「ですから、完璧を期するには事前の手配が不可欠なのです。ヘルマネー神を祀る神殿近くは商人の懐を狙う賊が大勢うろついています。そこを徒歩で向かわれては責任を負いきれません」
「賊に刃物を突きつけられたら大人しく財布を差し出せばよい。向こうも仕事だ。神殿近くで不浄の

血を流そうとはしない。知っているかね？　賊も敬虔なヘルマネー神の信者で、律儀にも仕事帰りには稼ぎの一割を賽銭箱に入れているそうだ」

人を食ったような言葉をぶつけるとルースはさっさと歩き始める。

彼は時々こうして警備関係者を振り回す。官費で身辺警護をしてくれるのはありがたいが、煩わしくもある。実際、外出時の行動、誰と逢ったか、用件まで詳細に記録されているという。

新連邦の閣僚ともなれば、そこらの国家君主より権限が大きい。特に大蔵卿であるルースは、加盟各国の蔵相を束ねると共に、連邦銀行の総裁職まで兼務している閣僚中の閣僚だ。安全確保と監視両方の意味で警護官を張りつかせる必要があった。

「――旦那、新聞買ってよ。刷り立てのほっかほかだよ」

子どもの売り子が近づき新聞を差し出す。商いに従事する人間は機を見るに敏だ。天気や醜聞ひとつにも商いの種があるかもしれない。そのためヘルマネー神殿周辺では新聞がよく売れた。

「おお、よいとも――おっと秘書を先に行かしてしまったか」

普段ルースは自分で支払いをしない。顔の利く店では月末一括払いが基本だったし、それ以外の店では常に傍らから離れない秘書に財布を預けている。

「確か外套に小銭が……」

外套を揺するジャラジャラ音がした。

「自分が立て替えておきます」

先程の警護官がゴルダ銅貨を少年に手渡した。人目を惹くような行為を続けて欲しくなかったからだ。

「毎度！」

子どもはにっこり笑うと次の客を求めて走り去った。

「ようやくポケットの奥から出てきたよ」

そう言って開いた掌には銀貨ばかりで銅貨が一枚もなかった。交易の決裁に使われるゴルダ金貨まで

混じっていたのは驚きだった（市中の商店では受け取りを拒否される）。
「釣りがありません」
「そんなものは要らん――というわけにはいかないのだったな、君たちは？」
「はい、護衛対象者から金品の授受は固く禁じられています」
そこまで厳密にしなくてもよさそうなものだ、と思ったが、「あとで秘書に貰ってくれ」と言うに留めた。
「それより、これをどう思うかね？」
買ったばかりの新聞の一面を見せる。
『帝国の華、スクナー皇妃ご懐妊か⁉』――本当のことならば目出度いことでしょうが、信頼性に乏しい新聞社ですから信憑性に欠けます」
「憶測記事かもしれぬが、事実であって欲しいものだ。新連邦と第二帝国の友好の架け橋となった御方だけになる。男子誕生ならば万々歳だし、姫君でも慶事であることに変わりない」
「両陣営の交流が一層活発になり、商人が益々儲かる、ですか？」
警護官が皮肉っぽい口調で言った。
「善いことであろう？　交易が盛んになれば産業が活気づくし、運搬業者も仕事にありつける。金持ちはどしどし金を使って町が潤う。贅沢な暮らしをまるで悪徳のように申す輩もおるが、それがまっとうな経済活動というものだよ」
警護官は納得しがたい顔をした。旧帝国時代、あまりに賄賂が横行し、その反動として新連邦の官吏は清貧を美徳のように思う者が多い。最高権力者たるデュマシオン・イスカ・コーバック連邦議会議長からして、私生活は質素極まりない暮らしをしているのだから。
「我らが敬愛する議長閣下も経済の本質は理解しておられるよ。現にわしの暮らしぶりをご存じだが、今まで一度として咎められたことがない」

そう言われてしまえば警護官も返す言葉がない。とはいえ、ルースの主張を認めたわけではなかったが……。

ヘルマネー神殿に到着すると、僧侶の出迎えを受けた。大口寄進者だけに扱いも一般参拝者とは別格だ。内陣の奥に案内される。当然のように警護官も付き従おうとして僧に無言で阻まれる。

「君はそこまでだ。この先には神話時代――《ペガーナ八柱》が地上に顕現していた頃の聖遺物が保管されている。わしの秘書ですら入れない」

「しかし――」

「何を心配するのかね？　《青の宮》が焼失した時でさえ、神殿の静謐は保たれた。邪心を抱く者は決して足を踏み入れない神域だ」

信仰を盾にされては勤務に忠実な警護官といえど引き下がらざるを得ない。他に出入り口がないことを僧侶に確かめると、ここで待つと答えた。

連邦首都の都としての歴史は旧帝国時代を含めても三世紀に満たないが、西部域における総本山としての権威を持たせるべく、征服戦争の折、ペガーナ僧が軍勢に同行し、各地の聖遺物を盗掠したことは有名な話だ。奪って得た物だけに奪い返されることを恐れる。信徒に対して開かれているかに見える神殿だが、囲む塀は高く堅牢で、門を閉ざせば軍隊すら突入を躊躇うような作りになっていた。しかも敷地内各所に目立たない形で立番僧が配置されている。ゆったりした長衣と頭巾で隠しているが、僧侶にしては筋骨逞しく目つきも鋭い。訓練された僧兵だと警護官は気づいていた。

階段を下りると左右を鉄格子で仕切った通路に出る。格子の向こう側の壁は床から天井までびっしりと扉が隙間なく並んでいる。すべて金庫だ。公にできない金を預かっているのだ。神殿側は中身に関して一切詮索せず、官憲が踏み込むことも認めない

ため、貴族が隠し財産を、盗賊が盗品を預けていた。歴代皇帝もしばしば利用したという。が、これも裏の顔のひとつでしかない。

通路の一番奥は行き止まりになっている。案内する僧侶が床石をひとつ外し、奥にある取っ手を引く。すると床の一部が沈み込み、階段が顕れる。事前に情報を得ていない限りまずこの隠し階段に気づく者はいないだろう。

さらに地下に下りると、また通路があり、先に進むと扉が待ち受けていた。かなり頑丈そうな作りだが、取っ手の類は見当たらなかった。

僧侶が三回連続で叩いて、一拍空けてまた一回叩く。中にいる人間への合図のようだ。

扉の目の高さに設けられた部分が開き、じろりと通路側の人間を見渡した。覗き窓が閉じ、いくつもの鍵が解錠されるような音が響いた。

ここまで見る限り、徹底した侵入者対策が講じられている。何より神殿のさらに奥という心理的障壁が人々の好奇心を抑え込む効果があった。加えて信仰や戒律に縛られた僧侶は秘密保持に適した集団だった。

「――おや、わしが最後となったか。お待たせして申し訳ない」

扉の向こう側には円卓が設けられ、均等の間隔を空けた八つの席はひとつを除いて埋まっていた。身なりも年齢もまちまちな七人は皆苦い顔でルースを見つめた。

「何しろ四六時中お上の手先が張りついているもので、多少小細工を弄さないと、秘密の会合が気取られる虞があってな」

そう言い訳しても先客の表情は緩まない。

「大物ぶるでない。新連邦政府の大蔵卿だろうが、所詮クレイトー商会など創業して半世紀にも満たぬ成り上がりよ」

そう罵声を浴びせたのはミナル人の商人だ。大陸を横断する《交易路》を確立し、莫大な財を成した

商いを生業とする一族のひとりで、その起源は有史以前まで遡れるといわれている。

「左様、今は威勢がよくとも財産を失うのは一瞬であるぞ。泡沫のごとく消えた商人がどれほど多いことか」

ヘルマネー神殿の司祭長だ。ペガーナ聖教前教皇をルーフェンから追い払った《大分裂》では《改革派》として名乗りを上げたが、この神殿に留まるための方便に過ぎない。

ルースはにこりと笑う。

「新参者であることは弁えておるとも。国境を越えた国際金融市場の立ち上げには《元老院》の助力なしには実現不可能だった。改めてご一同に礼を申し上げる」

《元老院》とは旧帝国成立以前、一〇〇〇年以上昔から西方西部域の経済を支配してきた人々の集まりだ。商売上は互いに競争相手であっても、社会全体に重大な影響を及ぼす問題に関しては財界として結託して解決に当たる。性質上、権力者に狙われるため組織の存在自体が長らく秘匿されてきた。旧帝国が滅びたのも、執政官サイオン・トゥール・アウスマルシア伯爵が元老院の妨害に遭い、改革のほとんどが頓挫させられたからだ。決着は軍事力で決まったかに見えるが、民心が離反させられていた時点で勝敗は決していたといえる。

ルースが元老院からの誘いを受けたのは、デュマシオンの使者としてサイオンに宣戦布告をするためルーフェンに赴いた時だ。彼らは財力はあるが武力はない。サイオンを打倒する勢力を欲していたのだ。

秘密結社の存在は実父にして初代会頭のリュン・クレイトーから聞かされていた。自由競争を信条とする父は元老院を嫌い、参加を拒み続けていたが、ルースの考えは違っていた。

西方の経済は中世の頃からほとんど変化がない。既得権益にしがみつき、商売敵を追い落とすことしか考えない商人ばかりだからだ。進取の気風に富

んだ指導者が社会の仕組みから作り直さなければならない。そのためにサイオンの陣営につくことを選んだが、その決断はすぐに間違いだったと気づかされた。謀略によって帝国の頂上に昇りつめた若き権力者は、自己の権力を強化することしか頭になく、クレイトー商会の財産を没収した。初代会頭が帝都本店の資産を各地に分散させていたため被害は最小限に抑えられたが、生き延びるため一時は裏切ったデュマシオンに詫びを入れて臣下の列に戻るという苦渋の選択をするしかなかった。

（あれは人生最大の失策であった……）

権力者に対する絶対的な不信がこの時刻まれたといえる。

元老院と手を結んだのも、サイオンへの復讐心が動機として一番大きいが、同時にデュマシオンに対しても利用されるだけに留まらないために、財界の後ろ盾を必要としていたからだ。

確かに元老院の支援により、旧帝国を滅ぼし、新連邦を樹立することができた。クレイトー商会も三大商家を追い抜くまで事業を拡大した。恩義はあるが、いつまでも下風に立っているつもりはなかった。

この場に集う連中は前世紀の遺物だ。商いは物々交換の域を出ず、余剰資金を貸し付け、利子と手数料を取るくらいの発想しかない。国際金融市場を資金調達と決済に役立つ程度にしか思っていない想像力の貧困さには笑うしかない。

とはいえ、今敵対するのは得策ではない。新時代になれば放っておいても淘汰されるだろうが、価値があるうちは精々利用させてもらうつもりだ。

「本日、お忙しい中お集まりいただいたのは、ここにいる全員にとっての危機をお伝えするためだ」

ルースは刺戟的な言葉を使って、全員の耳目を集める。自己の利益しか頭にない輩ばかりだけに危機感を持たせないと誰も真剣に耳を傾けようとしないからだ。

「また、大仰に言いよって。《覇王》レクミラー

の崩御により西部域を二分する大戦は回避された。儲ける機会は逸したものの、我らの業績は好調だ。どこに危機の芽がある？」

出席者はミナル人の言葉に同意の声、ないしうなずきを示す。予想通りの反応だ。

「我らの敵は連邦議長デュマシオンだ。早急に権力の座から引きずり下ろさねばならぬ」

一同は唖然とする。

それでも動揺を隠す程度の腹芸はできる。

「説明を求めてよいだろうな。貴殿は議長の忠臣として名が知られた男だ。旧帝国の執政官が権勢を振るっていた頃とは情勢が違う。今再び主君に背くとなれば相応の理由があろう」

ルースは鼻を鳴らして、

「異なことを仰る。我ら商人は忠誠心など持ち合わせておらぬ。利害が一致すれば後押しもするが、利が乏しくなれば離れるし、害が上回れば敵に回る。アウスマルシア伯と敵対した皆さま方に改めて申し上げることではあるまい」

「しかし――いや、話の先を聞こう。元老院全体の危機とやらをな」

出席者全員が身を乗り出してくる。

「権力者が富の集中を嫌った――大昔から繰り返されているありがちな話よ。ただデュマシオンは、それを実行する力も民衆の支持も兼ね備えている点が問題だ」

一同が唸った。旧帝国の執政官サイオンが政商の財産没収を行ったことが元老院を敵に回した。しかし金の力が万能ではないことを彼らは知っていた。所詮国家権力が行使する暴力に抗うことは不可能だった。五年前になる《グネシア内乱》では反デュマシオンで結束した国家、商人が《蛮人王》を陰から支援してデュマシオンを討とうとしたが、企ては失敗し、陰謀に加担していた三大商家のひとつドカーデンは解体に追い込まれ、もはや名前も残していない。

サイオンに敵対した時のように足元を揺さぶることはできる。が、平民の圧倒的な人気を誇るデュマシオンに対しては逆に処罰の口実を与えかねない。

「……レクミラーが亡くなったのは痛いな。新皇帝のクロムリーは帝国内の地固めにあと数年はかかる。当面新連邦に敵対する余力はあるまい」

「皇妃に子でも生まれれば尚更だ。デュマシオンの血を引いているのだからな」

「ならば連邦内の政敵を後押ししてはどうか？」

「どれも小物だ。せめてドレーバ王、ヒクソス王並の力がなければ金を捨てることになる」

そこで意見が尽きた。現在のデュマシオンは比類なき権力を誇っている。正面切って楯突こうと考える者はいない。このままでは西部域から逃げ出すしかないが、持ち出せる財など高が知れている。

「――策はある」

ルースが自信ありげに発言すると、一同は縋るような目を向けた。

「わしはデュマシオンが貧乏国の公子だった頃から知っている。先王に疎まれ、兄に殺されかけ、弟に背かれた。今でも当時負った心の傷は消えぬまま残っている。その弱みを衝くのだ」

おおっ、と喜びの声が上がる。

「骨肉の争いを仕向けるのか？　確かに善き考えだと思うが、奴の息子はまだ幼かろう。イシュカークの臣下の支持を集められるのか？」

「当然の疑問だ。しかしわしが目星をつけた反乱の旗頭は国太子ではない」

「では、誰だ――ま、まさか⁉」

ルースは薄く微笑み、その名を口にした。

イシュカーク女王にして元帝国皇女、サクヤー・イスカ・コーバックの名を――

第1話　イシュカークの女帝

西方暦１８４９年４月
帝国暦　２４４年４月

アイネリアス・ロス

1

デュマシオン・イスカ・コーバックの執務時間の半分以上は面談に費やされる。新連邦に加盟する各国の駐在大使を始めとして、時には国王、国太子と逢うこともある。だが彼としては要人などより社会的身分の低い人々と直に言葉を交わしたいと願っていた。より切実な問題を抱えているからだ。もちろん制限を設けなければ体がいくつあっても足りなくなるし、連邦議長という最高権力者の立場にあっても、何もかも要望に応えられるわけがない。むしろ誰よりも法に縛られた人間であり、組織の上に立つ者として情より理を優先しなくてはならない。訪れた者に諦めさせる、無理な望みだと納得させるために応じているといったほうがいい。

ただしデュマシオンとて現行の法が完全無欠とは露ほども思っておらず、現状に即していなければ是正することに躊躇いはない。だから政府の各部署は常に気が抜けなかった。いつ議長の呼び出しを食らうかわからないからだ。しかも「善処します」などという耳当たりがいいだけの通り一遍の返答は許されない。調査するにしてもその場で期日を決め、具体的な提言を含んだ報告書を求められる。連邦政府の官吏は貴族、平民の区別なく採用されるが、高い能力と倫理観に加えて体力まで要求される激職だった。

「次の客は誰だ？」

午後一番の面談者が退けた後、デュマシオンはエアリエルに訊ねる。

公式寵姫という肩書きがあるが、厳つい騎士服を纏い、腰に剣を吊るしている時は女の顔を決して見せない。イシュカーク国軍では親衛隊隊長であり、連邦政府では連邦議長付き補佐官兼特別警護官の役職を貰っている。平たく言えばデュマシオンの秘書であり護衛役といったところだ。

「気を遣わずに済む相手だが……かえって面倒と言えるかもな」
苦笑いに近い表情で応えた。
理由は応接間に入ってきた人たちの顔触れを見てわかった。全員イシュカーク人だったからだ。
「――いつ頃ご帰国あそばされますでしょうか？」
同郷の人間、それも顔なじみであっても定められた面談時間を延長できないことは事前に聞かされていたのだろう。挨拶を交わすとすぐに本題を切り出してきた。
「年内は確実に無理だな。商取引法の改正や為替手数料の課税、相続税の改定など金融関連の重要法案の審議が目白押しだ」
はるばる遠い国からやってきた同国人はあからさまに気落ちした表情を見せた。
「王が長らく国を空けて民を始め、国家運営に携わる諸兄に対しても申し訳ないと思う」
新連邦を立ち上げた時は、《東テラル首長国連合》同様に加盟各国の主権を尊重し、紛争解決と相互協力を主とした意見調整の場と考えていた。同様に議長職も象徴的な役割に徹し、皇帝のごとき絶大な権力を行使するつもりは毛頭なかった。
だが旧帝国の下で何世紀も従属を強いられてきた国々は自主自立の精神が欠如していた。帝国の軛から解き放たれても新たな国作りの展望もなく、自国の民をまとめることさえ苦労している国ばかりだった。結果、議会は国のエゴをぶつけ合う場となり、まとまる気配すらなかった。デュマシオンとしては無理して国が寄り集まる必要はなく、脱退は自由としていたが、独立して立ちゆかない国ほど自己主張が激しく、そればかりかかつての宗主国を滅ぼしたことを責めてくる始末だ。
同情すべき点はある。旧体制下では帝国の法に従うことを強制され、国内の改革ひとつでさえお伺いを立ててからでなければ始められなかった。帝国議会は皇帝の意を伝え、承認させる形式的な場に過

ぎず、議論を戦わせることなど一度としてなかった。帝国政府としても従属国の離反を防ぐため、食料自給率を下げさせたり、産業比率を意図的に偏らせた。異を唱えれば国主（王）の首をすげ替え、場合によっては軍を送り込み、国そのものを滅ぼした。

実情を知ったデュマシオンは、精神的土壌以前に、国の土台から改めていかなければ自立などありえないと結論した。

大幅な方針転換を余儀なくされたデュマシオンは、議会で連邦の理想、あるべき国の姿を押しつけた。いくら非難されようが、明確な形を提示し、成果を見せつけることで後から理解を得ようとしたのだ。議長にそのような権限はなくとも、デュマシオン個人には帝国を打倒した権威がある。真っ向から逆らえる者など誰ひとりいなかった。

それでも初期の頃は年間の半分ほどはイシュカークに戻る余裕があり、王としての務めも果たしていた。が、西方暦一八四二年に勃発した《メッシナ沖海戦》（連邦加盟国ラグールと第二帝国の海軍の交戦）あたりから即断即決を要する事件、騒乱が多発し、次第にデュマシオンの帰国期間は短くなっていった。一八四四年の《グネシア内乱》（《蛮人王》との最後の決戦）後、圧倒的支持を得て三選されたデュマシオンは（議長任期は四年）、庶子アーカディアを国太子に定めて後継者問題を決着させ、妻であるサクヤーを王妃から統治権を有する女王に昇格させた。共同統治の形ではあるが、国の運営を妻に委ね、自身は連邦に専念することにした。

「――イシュカークの民こそ陛下のお力を必要としております」

三期前の元国民会議議長は哀れさを誘う顔で訴えた。

「王妃――いや、女王の政に不満があるのか？留守居役から責任ある立場に変わったのだから、至らぬ部分もあるのだろうが、いちいち王が乗り出しては依存心が抜けぬであろうし、女王の面子も潰

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。